

「郷土史研通信」発刊の歩みを振り返って

蕨 由美

この度、郷土史研通信も回を重ね、100号発刊の運びになりました。第1号が発行されたのは、1993（平成5）年5月。その前々年に、会務を長く担われていた事務局長の原令子さんが逝去され、会の運営は大ピンチ！新参者の私が牧野光男新事務局長をお支えする体制で再出発しましたが、例会予定などの連絡が大変でした。私はフルタイム勤務で子育ての只中。今のようにスマホもPCもなく、夜の電話は敬遠され、連絡網も正しく伝わらず、案内はがきをプリントゴッコで刷り、宛名も手書きする時代でした。

そのころ、コンピューターも絵も古文書もお得意の関和時雄さんが登場、私にとってIT革命が到来しました。記事は私が集め、関和さんが「一太郎」で入力、版下を作製して、私の「3月例会報告 上野の史跡と下町風俗資料館を巡る」などの活動報告と行事予定を載せた連絡紙「郷土史研通信」1号がA4版1ページで発行されました。

「郷土史研通信」のタイトルやカットは、関和さんのPCの「花子2」での力作。記憶媒体が1MBのフロッピーディスクの時代、苦心の末、2号からやっと2ページ建て、年4回の季刊となりました、PCの進歩につれ、3年後は3ページ写真入りに、そして投稿記事も多くなって翌年から4ページ、時には6ページになりました。26号編集後記には、「原稿の質も向上してとても通信では扱えない原稿に、編集者としても苦労しています。中身の濃い研究発表は『史談八千代』へ」と

いう「ため息」が書かれるほどになりました。

その後、関和編集長から「編集してみない？」と誘われ、2000（平成12）年の31号から私も編集にチャレンジ。一太郎からWordへ移行したばかりでの版下作製は悪戦苦闘でした。

2001年の35号は、『ふるさと再発見 八千代の道しるべ』発刊の記録の臨時増刊号。「市民企画提案事業」の応募・申請から、血流量蔵道標の発掘、日々の調査と刊行・配本作業のすべてを記録として残しました。

2003年に40号に達した時、酒井正男さん指導の製本教室実習として、通信1号から40号までの合冊本制作を皆で行い、後の会員にも資料として活用していただけるよう博物館や図書館に

寄贈しました。



今読み返してみると、3号の「佐倉城下現地見学会」、7号の「日本三古碑」、9号の「吉橋八幡神社句額の未解決部分再検討と古文書学習会」は、2009年102歳の天寿を全うされた当時最高齢の平野仁蔵翁の筆。一方、2000年28号には小学6年の藤本涼輔君の「めぐりあえた二十四孝」の初々しい記事。続く29号の「本会ヤングは体力派？八福神巡りは自転車に乗って」の拙稿では、藤本少年と若手会員4人で、体力勝負の「お正月はチャリンコで初詣」を企画し、八福神を含む市内の寺社・古墳・史跡めぐりをしています。皆若かったですね。



現在最高齢の石井尚子さんも4号から毎号、精力的に執筆。32号の「正福寺を探す」は、高津の道標銘にある幻の「正福寺」故地発見の貴重な報告です。

合冊本献本後は、「郷土史研通信アーカイブス」として増田俊幸さんがご自身のHPに、34号から71号までをアップしてくださり、会員の閲覧と保存、公開に役立ってきました。

40号までの合冊本あとがきに、私は、会の連絡や活動アルバムはWEBサイト活用が主流となり、いずれ紙媒体としての通信発刊は役目を終え、100号合冊本制作はもうないかもしれないと書きました。

幸い、2011年から事務局体制が一新されて、通信編集担当も有能な新メンバーにバトンタッチされ、年3回の発刊を重ねて、100号達成に至りました。

2020年春、新型コロナウイルス感染予防のため厳しい外出制限が続く中、研究会活動のあり方も、オンライン発表やWEB会議へと移行せざるを得ない時代がもうそこまで来ています。今後、「郷土史研通信」の形態も変容を余儀なくされていくかもしれませんが、会運営の根幹である事務連絡に加え、喜び・悲しみを伝える会員の動向、ちょっとした「新発見」や思い出の感動を共有する場としても、未永く続いていくことを期待しています。